

宇電懇ニュース

宇宙電波懇談会事務局発行
(名古屋大学空電研究所)

目次

- I. 宇電懇シンポジウム報告
- II. 第7回宇電懇運営委員会報告
- III. 第14回電波天文研究施設WG報告
- IV. 第15回電波天文研究施設WG報告
- V. 改組準備調査委員会報告
- VI. NRO共同利用委員会報告
- VII. 電波科学研究連絡委員会報告
- VIII. 宇電懇シンポジウムテーマ募集
- IX. NRO新M1/D1ガイダンス
- X. 事務局からのお知らせとお願い

I. 宇電懇シンポジウム報告

昭和62年度の宇電懇シンポジウムが12月16日午後から18日の昼まで野辺山宇宙電波観測所において開催され、参加者は約90名で、NRO以外の参加者が70名と多く、さらに電波天文以外、宇電懇会員以外の参加者も多くみられました。来年度から国立大学共同利用機関としての国立天文台が発足し、電波天文分野においても野辺山宇宙電波観測所、同太陽電波観測所、豊川太陽電波観測所が合併して野辺山電波天文台を構成することになっており、ユーザーの関心が非常に高いことを示していると思われます。

16日は宇電懇運営委員長の挨拶に始まり、続いて先日なくなられた鈴木博子さんの事故の報告があり、出席者全員で黙祷しました。その後夕方まで、現在進んでいる天文台改組、新国立研の体制などの議論の紹介と質疑がありました。その中で改組準備調査室によって行われたアンケート調査のうち、電波天文関係者に注目した解析結果が報告されました。さらに電波天文以外の分野での議論の様子も紹介されました。夜は宿舎である「愛岳」にて懇親会が催され、最近仁科賞を受賞された森本、海部両氏、更にインドのバップ賞を受賞された福井氏からの挨拶がありました。

17日は午後の前半まで野辺山電波天文台のこれからの計画案について詳しい

説明がありました。電波ヘリオグラフに続き、スペースVLBI、ミリ波アレイ（LMA: LARGE MILLIMETER ARRAY）、サブミリ波天文学などの説明がありましたが、最後の中井氏による「飛行船によるサブミリ・遠赤外観測」は発想が特異であり、多くの人々の注目を集めました。

17日午後の後半から18日の昼までは、各大学・機関・関連分野の将来計画が紹介されました。オーストラリアにミリ波望遠鏡を設置してマゼラン雲を観測する計画とか、景気刺激のための臨時予算による各種望遠鏡建設状況などが紹介されました。「ロン・ヤス TELESCOPE」とか、「貿易風」といった言葉も聞かれました。多くの望遠鏡が実際に建設されており、また具体性を持った新しい計画が次々に紹介され、今までの、将来計画に関する宇電懇シンポジウムとはひと味違った感想を持ちました。

17日の夜は食後、「愛岳」で20年後をになう若手の抱負を聞く懇談会が催されました。林左絵子氏によるハワイの様子を紹介の後、自己紹介を兼ねた若手の多くの人の考えを聞くことができました。

今回のシンポジウムの旅費は、田原総研と森本総研から出していただきました。シンポジウム期間中は、野辺山宇宙電波観測所の職員の方々に大変御世話になりました。特に細田知子さんには宿泊・食事、懇親会の御世話をいただきました。なお、シンポジウムの収録は1月末頃印刷の予定です。印刷費には主に宇電懇の運営費を当て、不足分については総研から補助をいただく予定です。

II. 第7回宇電懇運営委員会報告

日 時: 1987年12月18日13時15分～15時

場 所: 野辺山宇宙電波観測所所長室（宇電懇シンポジウム後）

出席者: 田原博人、海部宣男、石黒正人、小川英夫

観目信三、甲斐敬造、（事務局: 柴崎清登）

事務局報告

1. 宇電懇ニュース第76号発行 11月17日（発送12月1日）

追悼: 鈴木博子さん（富山大、大石）

東京天文台改組準備調査室報告（宇都宮大、田原）

会費納入依頼

電波天文研究施設検討WG報告を掲載することにした（第10～13回）

2. 宇電懇シンポジウム

サーキュラーNo. 1 発送 9月16日

サーキュラーNo. 2 発送 11月10日

サーキュラーNo. 3 発送 12月10日

世話人分担 旅費: 田原、プログラム最終案作成・宿泊手配等: 海部、

収録: 小川、通信・雑務: 柴崎

野辺山関係者以外からの出席申込者数: 61名

内、宇電懇会員以外からの出席申込者数: 11名

3. 鈴木博子さんの葬儀

香料：1万円、生花料：1万2千円

4. 会員の移動等（本ニュース X. 参照）

議題1. 次期宇電懇事務局について

提案：東大理（現在当事者と話合い中）

宇電懇の裾野を広げるためにも、事務局を固定化せず新しい事務局を開拓する必要がある。（今までの事務局：空電研3回、名大理2回、宇宙電波2回、野辺山太陽電波1回、宇都宮1回）

議題2. 次期運営委員の選挙（来年4月頃）について

現在の運営委員は小数の研究機関に偏り過ぎている。さらに委員が固定化して、10年以上の委員も多い。宇電懇の発展のためには新しい人が運営委員に選ばれるようにする必要がある。10年以上の運営委員経験者は、

赤羽、森本、田中、田原、鰐目、海部、小川、石黒、川尻。

現在の運営委員の所属研究機関分布は、NRO：3名、名大理：3名、野辺山太陽電波：1名、空電研：1名、宇都宮：1名、富山大：1名。

なお来年度より、NRO、野辺山太陽電波、空電研太陽電波は合併して野辺山電波天文台となるので計5名となる。

次期運営委員の選挙の際には、なるべく新しい委員が、全国各地から選ばれるように宇電懇会員に訴える必要がある。

議題3. 来年度の宇電懇シンポジウム

5月の総会で議論するテーマであり、前もって宇電懇ニュースで募集する。現在、「星間分子」（鈴木博子さん追悼シンポジウム）が提案されている。旅費としては、森本総研、高窪総研、さらに新しく始まる総研が考えられる。

議題4. 仮運営協議員の推薦

内示後すぐに仮運営協議員を選出し、現在の改組準備調査委員会は仮運営協議員会に引き継がれる。仮運営協議員外部委員の選出については天文研連に諮られたが、改組準備調査委員会で選出するようにいわれたので、1月16日の調査委員会で選出することになっている。現在調査委員会の外部委員は、緯度観、空電を除くと7名である（竹内、田原、奥田、内田、杉本、松本、小暮）。仮運営協議員の外部委員の定員は10名である。そこで宇電懇関係者としてだれを推薦するかを議論し、2名の名前が上がった。内部委員については1月18日の教授会で選出されることになっている。

議題5. 定常時の運営協議員及び共通の専門委員の選出方法について

アンケートによると直接選挙の要求が大きいのでこれを採用し、研究班を作って直接選挙し、この弱点をカバーするために調整機能を付加することを提案する。選挙人名簿を作成する際に、宇電懇や光天連などから班員名簿を提出し、重複しないようにチェックすること。調整方法としては、例えば直接選挙する委員の人数を定員より少なくしておき、残りを研究分野とか研究機関を考慮して決めることが考えられる。

議題6. 電波天文専門委員の選出について

電波天文研究班メンバーによる直接選挙で選出し、系主幹が宇電懇運営委員会と相談して調整することを提案する。

議題4、5、6については調査室及び調査委員会で議論されるので、宇電懇関係の調査室メンバーや委員がここでの議論を反映するようにする。

議題7. 宇電懇としての次期計画

電波ヘリオグラフ以後の計画としては、宇電懇シンポジウムで示されたように、LMA、スペースVLBIなどがあるが、これらをどう検討しサポートしていくかについて今後引き続いて議論していくこととした。

Ⅲ. 第14回電波天文学研究施設検討WG報告

日時：昭和62年11月26日15時50分～17時50分

場所：野辺山宇宙電波観測所輪講室

出席者：NRO 森本、海部、石黒、東条、平林

NSR 中島、塩見、小杉、甲斐

RIA 鱈目、柴崎

議題1. VLBIの共同利用 - 具体的提案 - (提案者：平林)

資料「NROにおけるVLBIの共同利用について」(VLBIグループ)に基づき、6項目の具体的提案がなされた。その中で、ミリ波でのVLBIネットワーク作りを積極的に行った方がよいとの指摘があり、それを含めてVLBIグループの提案を承認した。この提案に基づいた行動については、まず宇電懇シンポジウムで内容をユーザーにはかり、広報活動・勧誘などを行うことになった。共同利用オープン化は共同利用委員会等にはかり、来年のユーザーズミーティング後？

議題2. 野辺山電波天文台に於ける内部体制

・人事検討のための代表者の推薦

4人委員会(仮称)より人事検討のための、電波天文の代表を推薦してもらった。その結果、森本氏が電波天文代表として今後他の分野と人事検討を行うこととなった。なお引き続いて4人委員会で具体的人員配置について詰めてもらうこ

とした。その際、宇宙電波関係と太陽電波関係（野辺山・豊川）でまずそれぞれの案を作成し、それを持ち寄って相談することとした。

- ・内部組織について（合同所員会議の提案を受けて）

合同所員会議で提案された海部案に基づいて議論を行った。系主幹の位置づけや、運営委員会に幹事（系主幹+2所長+ α ）を置き幹事会を構成する案の議論を行った。早急に決定する必要はないので、次回12月18日のWGを拡大とし、もう一度多くの人の意見を聞くこととした。12月18日は午前中まで宇宙電波シンポジウムなので外部の人の意見を聞くことができる。

IV. 第15回電波天文学研究施設検討WG（拡大）報告

日時：昭和62年12月18日15時15分～17時15分

場所：野辺山宇宙電波観測所輪講室

出席者：NRO 森本、海部、石黒、長谷川、井上、宮沢

NSR 甲斐、中島、川島、塩見、小杉、沢

RIA 鰐目、柴崎、西尾、鷹野

名大理 小川

宇都宮 田原

議題：野辺山電波天文台の内部組織について

- ・組織案説明（海部）

- ・所員会議：電波天文台の台員の総意を諮る（約55名）。

- ・運営委員会：電波天文台の運営に関する日常的なことを議論する。

メンバー 教授+助教授+ α ～ 15名。

α の内4名は所員による投票を参考にして電波天文台長が選ぶ。

さらに台長が必要と思う人を任命することがある。

当面任期1年とする。

（所員会議、運営委員会は太陽電波と宇宙電波で一緒にする）

- ・各種委員会：運営委員会で必要に応じて設置する。

- ・幹事会：主幹+2所長+ α （ α は状況に応じて決める）

運営委員会の下ではなく、主幹の下につける。

- ・系主幹と観測所長：任期2年。運営委員会で提案して所員会議に諮り、電波天文専門委員会において選出される。

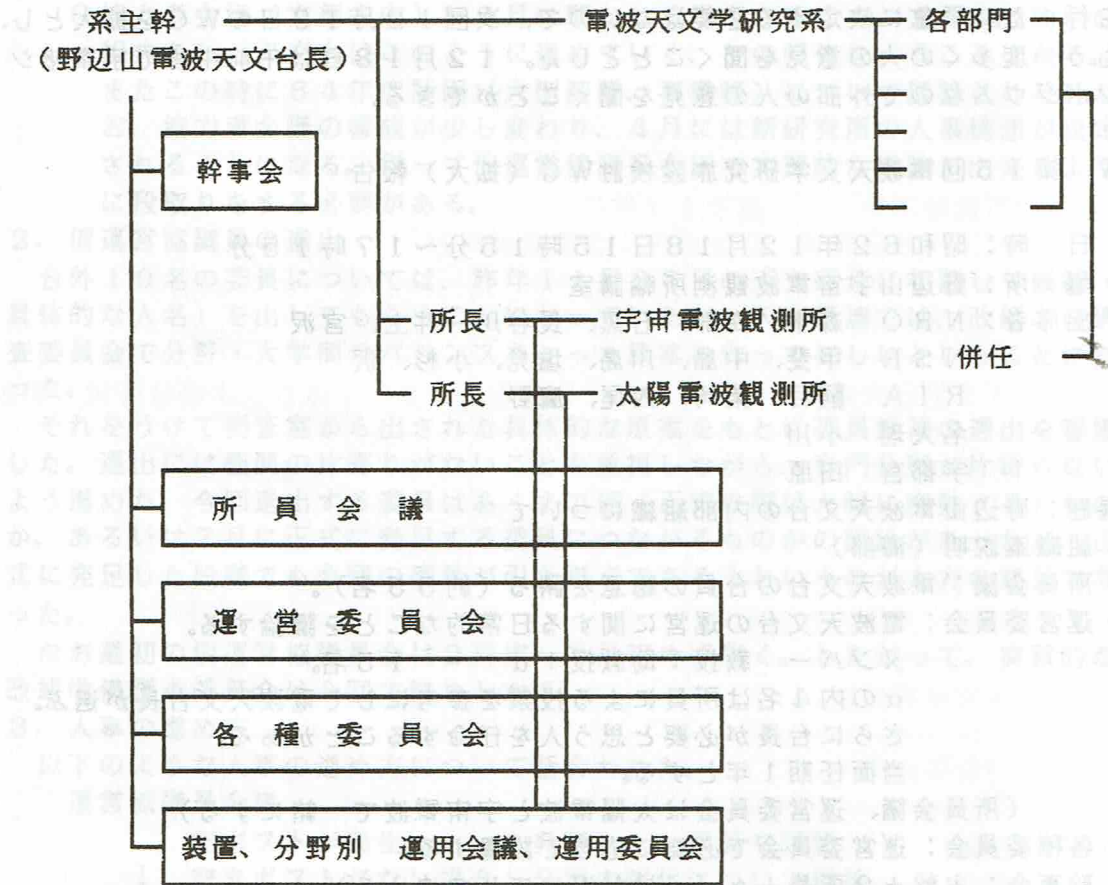
系主幹は、台長として野辺山電波天文台を代表するとともに、幹事会（主幹会議）に出席して国立天文台の運営を行う。観測所長は野辺山電波天文台の共同利用に責任を持つ。

- ・教官は研究系に所属し、大部分観測所に併任する。観測所所属の教授・助教授はどうなるのか。（観測所所属の教官の要求は出しているが当初は難しい）

- ・技官は主に観測所に所属する。

- ・人事と予算については別途考慮する（次回以降のWG）

野辺山電波天文台組織図



V. 改組準備調査委員会報告（田原、鯉目）

1月16日に東京天文台改組準備調査委員会が開かれた。主な内容は概算要求の内示、仮運営協議員の選出、一般人事の進め方であった。

1. 概算要求内示について

台長から以下の報告があった。

（1）国立天文台（仮称）創設 昭和63年7月1日設置

（2）組織

台長

企画調整主幹 教授1（併任）

研究系（6研究系、22部門、2客員部門）

研究系名	部門	教授	助教授	助手
電波天文学研究系	5	5①	5	10
光学赤外線天文学研究系	5	5	5	12
太陽物理研究系	2	2	2	4
位置天文・天体力学研究系	3	3	7	16
理論天文学研究系	2	2①	2①	4①
地球回転研究系	5	5	8	8
附属施設	8施設		13	27

○は外国人客員

○は客員

技術部 部長1（併任） 課長2、補佐2、10係43

管理部 部長1 課長3、補佐4、14係33

附属施設 6係22

（3）経費

○臨時事業費（電波関係の1件のみ認められた）

「超低雑音素子による二次元電波センサーの開発研究」

5年計画の1年次として約2千万円が認められた。

○大型観測装置調査費

具体的にどの装置が明示されていないところを見ると、要求全般にわたっていると思う。経費の殆どは会議費となるであろう。

(4) その他

○東大理学部への振替

教授3、助教授4、助手8、技官5、事務1、合計21名

○空電からの振替

教授1、助教授1、助手2、技官2名

○協力者会議（文部省内）が2月に開かれる予定。そこで、文部省は内示の報告をし、天文台はこのように進めていく、との報告をすることになる。またこの時に64年度計画（大型装置、事業等）について議論される。なお、協力者会議の構成が少し変わり、4月には新研究所の人事構想が決定されることになる。従って仮運営協議員会議で実質的な議論が出来るように段取りをする必要がある。

2. 仮運営協議員の選出

台外10名の委員については、昨年11月25日の天文研連に相談して候補（具体的な人名）を出してもらうことになっていたが、天文研連では、改組準備調査委員会で分野・大学間のバランスをとった原案を作ってほしいということになった。

それをうけて調査室から出された具体的な原案をもとに委員候補の選出を審議した。選出には機関の片寄りが無いことを重視しながら、専門分野が片寄らないよう進めた。今回選出する委員はあくまで仮（正式の際は大幅に変動する）なのか、あるいは7月に正式に発足する委員につながるものかの議論があったが、正式に発足した段階でも今回の委員が引き継ぐであろうというのが大方の意見であった。

なお最初の仮運営協議員会は2月末～3月初め頃開く。したがって、実質的な改組準備調査委員会は今回で終りとなる。

3. 人事の進め方

以下のような人事の進め方について話合われた。

運営協議員会議

空ポストが発生 : 発議し、一般論を議論

↓ 空きポストがない場合：分野の強化について議論

人事委員会（台内の常設委員会、この委員会の中に台外委員を加えるかどうかについては、お目つけ役の意味でも加えるのが良いのではないかとこの意見が強かった。）

↓ 分野の決定、公募か推薦か決定

運営協議員会議

人事委員会の報告を受け、分野を決定し、公募人事か推薦人事か決定し、

人事選考委員会を設ける（台内3名、台外2名程度で構成するという考えが強い）

↓

公募（研究系の教官は原則として公募）

↓

人事選考委員会

公募・推薦にもとづき、候補者を決定

↓

運営協議員会議

2/3以上の賛成で決定

VI. 野辺山宇宙電波観測所共同利用委員会報告（田原、鰐目）

諸報告

○森本所長から以下の報告があった

・今期共同利用が11月12日よりスタート。

・11日22日に鈴木さんが急逝された。同日付けで助教授に昇格。

・45m望遠鏡

ミリ波VLBI、スペースVLBI観測の成功。15GHz受信機の製作

・干渉計

多周波数・広域化のための改修

レーザー源で0.1"の分解能を達成

・電算機

エリダヌスの試行を開始した。リブレスに向け準備。

・受信機

SIS受信機が12台動くようになった。

・将来計画の検討

スペースVLBI：宇宙研を中心に野辺山と電波研が協力して進める

ミリ波アレイ：アンテナの大幅増設

サブミリ、遠赤外：地上を離れたものを考える

○プログラム専門委員会から今期の採択について報告があった

今年度の応募・採択件数は

I期：103件応募（内37件が外国）のうち36件（内9件が外国）を採択した。

II期：67件応募（内19件が外国）のうち23件（内5件が外国）を採択した。

選考にあたっては従来通りレフリーの評価を基準に進めた。なお若くて意欲的な人、機関のバランスを考慮し、評価が若干劣っていても採択した。

装置の立上げにからむものも評価した。

議題

1. 62年度事業報告

資料が配布された（省略、天文台年次報告を参照）

2. 63年度事業計画骨子

- ・ビーム伝送系の大幅改造、パネルの一部張り替え、コリメータを新しくする（～1"の精度が期待される）
- ・電算機リブレスに向けての作業

・受信機の開発

3. 64年度概算要求骨子

電波ヘリオグラフ（2年計画）、電算機のリプレイス、および1講座要求が主な内容である。

4. 研究員の採用について

1月10日締切で8名（東北大1、東大2、東京天文台3、分子研1、京大1）の応募があった。選考委員会（甲斐、藤本、石黒）から、研究能力、観測所及び当人にとってプラスになるかどうか、機会均等の観点で審査し、小林、平野の2名を任期2年で採用する案が出され、了承された。

なお、現在研究員である亀谷、半田両氏が学振特別研究員に採用される予定なので、さらに1名の欠員が生じる。選考委員会の結果を参考にし審議した結果、北村氏を任期1年で採用してもよいことになった。

5. NROの人事一般について

所長の任期は、3月31日迄であるが、6月30日まで3カ月延ばしてもよいことになった。

現在のNROに対応する定員内示は教授3名、助教授5名、助手9名であった。構想としては、これに $+\alpha$ を加えた陣容とする。現状と比較すると助教授以上が少ない。助手の昇格を進めるばかりでなく、助教授を外部から採用することも検討する。

今後とも人事交流を積極的に取り組む。

6. 共同利用委員会委員の任期延長について

国立天文台の発足が7月1日になったことにより、今年3月31日で任期の切れる各委員の扱いをどのようにするか審議した。いずれにしても7月から新規になるので、以下のように処置する。

- ・共同利用委員会： 任期を3ヶ月延長する。
- ・共同利用専門委員会： 3月31日で終える。
- ・プログラム専門委員会： 委員会の開催は予定されていないが、一応任期を3ヶ月延ばし残しておく。

7. 改組について

古在台長から改組に関する内示の報告があった（内容は改組準備調査委員会報告を参照して下さい）

電波天文専門委員会について意見が出された。現在の共同利用委員会とあまり変わりがないが、より専門的な事項を扱うことになるであろう。小委員会としては、プログラム小委員会の他に装置開発小委員会、電波ヘリオグラフ建設小委員会（もし通れば）の必要性が出された。分野別の専門委員会の他に、電波ヘリオグラフとSOLAR-A、スペースVLBI等についてはAD HOCの専門委員会が、分野をまたいで必要ではないかとの指摘があり、次回4月8日に整理して議題として提出することとした。

委員の選出方法については、宇電懇運営委員会で出された意見を紹介した。

VII. 日本学術会議電波科学研究連絡委員会第13期報告（鰐目信三）

第13期電波科学研連は昭和60年7月に発足した。この直後に宮川委員、田中春夫委員長・会員が急逝するという出来事があり、混乱した。それぞれ後任の天野橋太郎委員、大越孝敬委員長、早川幸男会員が選出された。また、学術会議会員選出の方法が今期から変更になり、これに伴い、学会等と密接に対応する研連とそうでない研連との差別が生じ、電波科学研連の性格についての議論がしばしば行われた。委員会は昭和63年1月までに都合8回開かれた。

今期の主な活動としては

①1987年8月第22回総会（テルアビブ）参加及びこれに関連する活動、

加藤進教授のAppleton賞受賞

②URSIの将来に関する会議（Corsendonk）に参加

③第24回総会（1993）の日本誘致（京都）

等があり、研連として推進あるいはこれに準ずる扱いをした事項としては

④STEP計画の推進の承認

⑤名古屋大学空電研究所改組計画の推進に賛同したこと

⑥赤道レーダー計画の推進に賛同したこと

⑦電波ヘリオグラフ計画の装置検討作業班の活動を支持したこと

等であった。なお、未解決あるいは次期引継事項としては

⑧小委員会設置を公認させること

⑨URSI会員制度の改訂

⑩古賀賞の運用資金の確保

⑪研連委員の通算任期3期の新制度の対応策

等である。今期も各分科の活動報告は毎回の委員会で活発であった。J分科関係では国立天文台（仮称）、野辺山電波天文台（仮称）等の報告をした。

VIII. 昭和63年度宇電懇シンポジウムのテーマ募集について

第7回運営委員会報告（II. 参照）にあるように、昭和63年度の宇電懇シンポジウムのテーマを募集します。テーマをお持ちの方は事務局まで連絡下さい。5月の総会に提案して議論していただく予定です。

現在、「星間分子」（鈴木博子さん追悼シンポジウム）の申込があります。

IX. NRO新M1/D1ガイダンス（NROよりのお知らせ）

昨年12月の宇電懇シンポジウムで議論がありましたように、野辺山宇宙電波観測所では全国の大学院生新M1/D1の皆さんに当観測所の研究内容の紹介をし、電波天文学を始めるきっかけになるようなガイダンスの開催を検討しています。

御存じのように本年7月から野辺山宇宙電波観測所は国立共同利用研究所の一

観測所に組織替えになり、広く全国の大学院生との交流が出来るようになります。一方この間、宇宙電波の将来計画について、大型ミリ波アレイ・スペースVLBI・サブミリ波バルーンなどが具体的に検討され始めています。電波天文学をさらに大きく発展させていくために、今後多くの若い人の参加が望まれます。

新年度早々の4月中旬、上記のようなガイダンスを、一泊二日で見学を兼ねて野辺山で、旅費・宿泊費はNROで半額程度負担して開催することを検討しています。(現金支給は遅れる可能性があります。)参加希望者は指導教官あるいは教室主任を通じて申し込んでください。詳細は後日発表します。NRO関連の研究をしようと考えている新M1/D1の方は是非多数参加してください。また各大学のスタッフの方は、新入院生との相談その他よろしく御配慮お願い致します。質問・相談などはNRO井上 允(EXT.67; 部屋直通 0267(98)2927)までどうぞ。

X. 事務局からのお知らせとお願い

会員の移動: 大石雅寿 NRO → 富山大理物理
長瀬文昭 名大理物理U研 → 宇宙研

新入会員: 別段信一(三菱電機通信機製作所: 尼崎)

次期事務局について:

II. の宇電懇運営委員会報告の議題1. で、次期事務局の候補として東大理(天文教室+理学部施設)が上げられていますが、当事者より承諾を得ましたのでお知らせします。5月の宇電懇総会(天文学会会期中)において提案し、決定していただくことになります。

宇電懇ニュース原稿募集:

宇電懇会員に知らせたいニュース、連絡事項、意見、近況、海外情報などを事務局までお寄せください。研究会等の案内や報告、それに各種ビジネスミーティングの報告も歓迎いたします。国立天文台、野辺山電波天文台等についての意見をどしどしお寄せ下さい。

宇宙電波懇談会事務局	〒442	豊川市穂ノ原3-13
代表 鰐目信三		名古屋大学空電研究所
秘書 柴崎清登	TEL.	05338-6-3154 (代)
		05338-4-5711 (FAX)
郵便振替口座	名古屋 4-	42399 宇電懇事務局